循環し形を創造す

那古野円頓寺らしさを残存させたこれからの円頓寺創出

全観パース　兼　南面立面図

01. 那古野 円頓寺の軌跡

1600 年代 ― 1700 年代～ ― 1970 年代 ― 2022 年

清須越による名古屋城の築城

歴史的文化と景観の形成

徐々に活気を失った商店街

未来へ向けた事情の取り組み

名古屋城築城から物流を軸に発展した那古野円頓寺。その歴史が四間道や堀川、円頓寺商店街などの景観を形成した。周辺には築城を由来とした材木店も多く分布している。1970 年代頃から少子高齢化の影響で徐々に衰退したこの地域だが、現在では民家のリノベーション、インキュベーションの取り組みも進んでいる。

02. 現状の問題提起

i) 失われた円頓寺の活気

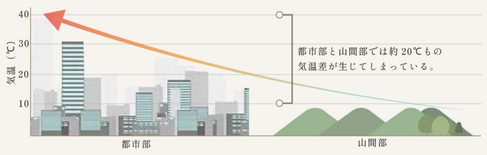
多くの人でにぎわう (1950 年頃)

1970 年：高齢化
1975 年：少子化
1976 年：堀川駅廃業
2007 年：超高齢化
活気が失われてきた
円頓寺商店街

人が少なく活気がない (2000 年頃)

少子高齢化によって引き起こる交流の希薄化は、地域性の欠如や伝統文化の喪失などにつながり、地域の魅力を減退させる。実際にこの地域では小学校合併が行われ、幅広い年代単位でのコミュニティーが失われたのも事実であるため、未来へ向けて交流を促し、文化を形成させていくマネジメントが必要である。

ii) 都市部のヒートアイランド現象



都市部で多くみられるヒートアイランド現象は、地球温暖化や異常気象などの環境問題の原因となるだけでなく、熱中症などの人体への悪影響を及ぼす危険性がある。これからの都市構造を未来へ紡ぐためにも、グリーンインフラ、SDGｓの取り組みが急務となっている。

03 . コンセプト

i) 木を通じた魅力発信

那古野円頓寺周辺の歴史的建造物群に使用されるヒノキ材。木材には、「調湿性による健康維持」や「手触り（触覚）」「温もり（視覚）」「薫り（嗅覚）」「再生可能な自然資源」「二酸化炭素固定化」などのような様々な特性を持っており それらを体感することで魅力を現在から未来へ発信する。

ii) 地域と環境に配慮したシステムづくり

本提案では、地域をマネジメントする為の循環を創る。「資源を利用する人々の循環」「地域に還元する資源の循環」「廃資源活用」の循環を相互に関係させ、敷地に留まらず地域そして日本へと大きなムーブメントへと拡大することを最終目的として提案する。

04. 提案

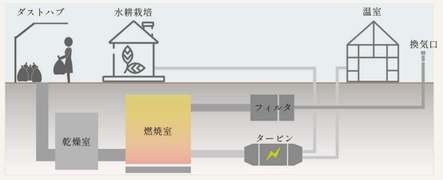
i) 木を体感するワークショップ

周辺に多く分布する材木店の方々と連携して木材の魅力を体験型ワークショップやリノベーションイベントを通じて知ってもらうためのプログラムを提案する。アトリエ、ギャラリーなどを設けアウトプットができるアクティブな場を提供し、多くの人が創造力を働かせるプラットフォームに。

ii) 水耕栽培とガーデン

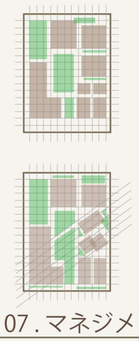
敷地全体にガーデンを散りばめることで、緑地化や食物の栽培美観を実現する。並行して水耕栽培を行い葉物野菜を供給する。栽培された作物はカジュアルダイニングで提供され、提供されるメニューはマルシェにてお惣菜として販売することで、地域の人々の暮らしを支える機能として運用する。

iii) バイオマス発電



ワークショップやガーデン、周辺の商店街から出る廃資源を地下のバイオマス発電で発電燃料として再利用し、水耕栽培の電力や、植物温室の温熱として循環させることで、環境に配慮しつつも、人々の暮らしを支える基盤的な役割を果たす。本提案では、公害や景観に配慮し地下に計画するものとする。

05. 平面計画

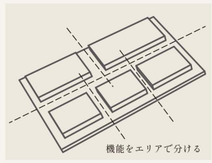


①グリッドで区切り
機能ごとに配置する。
隙間にはグリーン
ガーデンを挟む。

②一部グリッドを傾け
より細かく砕く。
細分化されたことで
敷地に表情を持たせる。

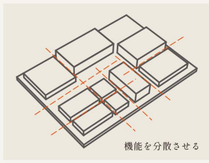
06. ボリュームの操作

①配置する



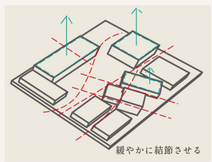
敷地が比較的広いため、機能ごとにエリアで区分することで、敷地全体で計画案を表現することができる。

②切り分ける



エリア分けしたボリュームを各機能に合った規模でさらに細かく分ける。並行して動線を整備して、アクセスを改善。

③交ざり合う

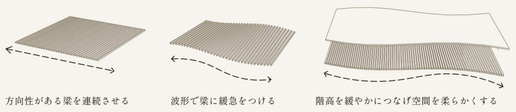


分棟同士の中間領域と中庭の空間のつながりを配慮しつつ面と面を緩やかにつなげる。回遊性の向上と交流の誘発。

06. 建築的操作

i) 梁で方向性を曖昧化する

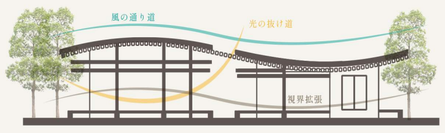
①配置する　①配置する　①配置する



方向性がある梁を連続させる　波形で梁に緩急をつける　階高を緩やかにつなげ空間を柔らかくする

方向性のある梁部材を波形に配置することで、階高が緩やかにつながる。空間をただ分けるのではなく、波形の山と谷で階高が変わり、谷の部分は落ち着いた空間に、山の部分は開放的な空間として計画する。

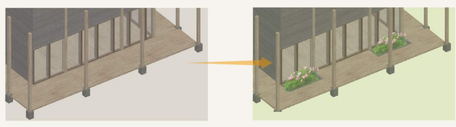
ii) 中間領域



日本の伝統的な中間領域である「縁側」は様々な交流を生み出す。また、縁側と中庭を組み合わせることで、屋外同士を繋ぎ、視野を拡張する。他にも光や風の抜け道となり、居心地の良い空間を地域の人々に提供し、新たな恋流の場として運用していく。

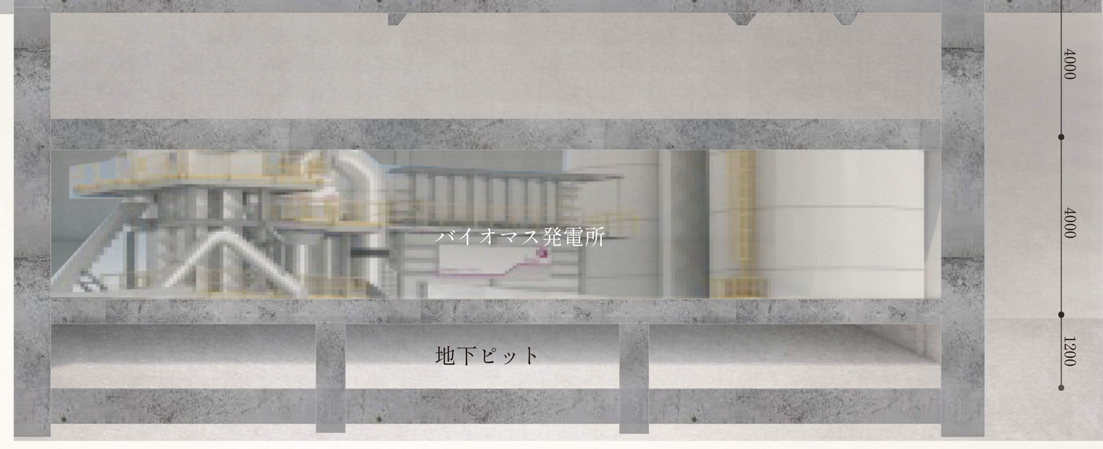
iii) 縁側花壇

（従来の縁側）　（縁側花壇）



縁側だけでの心地の良い空間の創出には限界がある。そこでガーデンを建築的に縁側に組み込むことを提案する。これによって縁側という一つの中間領域を豊かにしつつ、都市緑化の役割を担い、一つの景観を作り出す。

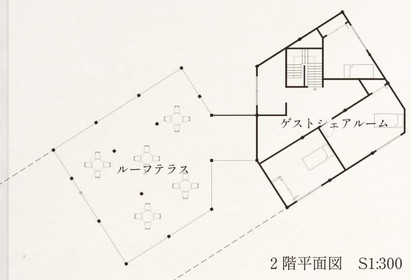
07 . マネジメントスキーム



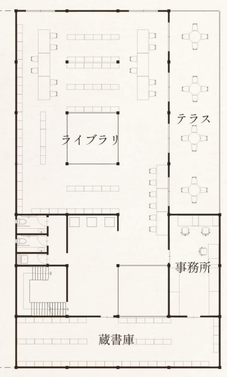
1階平面図　S 1:300

08. エリア区分

①グリーンガーデンエリア
②プロダクションエリア
③アクティブエリア
④カジュアルエリア
⑤賑わいの広場



2 階平面図　S1:300



2 階平面図　S1:300

建築概要			
地域区分	商業地域	フレキシブルルーム	131.3 ㎡
敷地面積	4541 ㎡	ギャラリー	67.5 ㎡
建蔽率	80%	クラフターズラボ	147.0 ㎡
容積率	400%	1 階ライブラリー	167.6 ㎡
延床面積	4064.1 ㎡	2 階ライブラリー	343.2 ㎡
1 階面積	4064.1 ㎡	カジュアルダイニング	252.6 ㎡
2 階面積	4064.1 ㎡	コワーキングスペース	110.3 ㎡
地下面積	4064.1 ㎡	シェアスペース	109.9 ㎡
		1 階シェアルーム	100.9 ㎡
諸室概要		2 階シェアルーム	112.6 ㎡
地下バイオマス発電所	1245.8 ㎡	ルーフトップテラス	100.9 ㎡
シェアオフィス「壱」	109.4 ㎡	グリーンハウス	110.3 ㎡
シェアオフィス「弐」	109.4 ㎡	1 階ファクトリー	256.3 ㎡
シェアオフィス「参」	73.5 ㎡	2 階ファクトリー	256.3 ㎡
シェアオフィス「肆」	70.9 ㎡	3 階ファクトリー	256.3 ㎡

ライブラリー外観

中間領域の賑わい

バイオマス温熱グリーンハウス

一階のライブラリーは広場と中間領域を介して繋がるカジュアルなスタイル得あるのに対し、二階は落ち着いたライブラリとして運用する。

中間領域（縁側）同士の間には、光の差し込む別の中間領域（小道）が生まれる。人々の視線や活動が曖昧に交ざり合い交流を誘発する。

再生可能エネルギーのバイオマス発電から発生する温熱を、植物の温室熱として再利用する。より無駄のない環境に配慮した資源循環計画。

こかげ広場と縁側

アトリエと中庭

広場につながる

広場を中心に配置された諸機能には、それぞれ広場に面した位置に中間領域を設けることで、広場と室内のアクティビティを一体化させる。

天井高が波形に沿って変化していく室内では、階高ごとに落ち着きとアクティブの表情がありそれぞれの空間で人々が創造活動を行う。

動線を張り巡らせて広場に集約することで、回遊性と人の流れのバランスをとる。分散しすぎないように計画し人の溜まりを生む

アトリエ 1　3 FA　A20067　駒村　温人